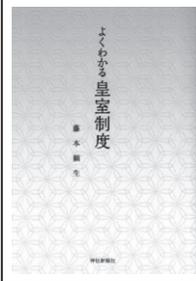


藤本頼生著

『よくわかる皇室制度』

神社新報社 平成二十九年十一月 A6判 一七四頁 本体二〇〇円



著者の國學院大學神道文化学部の藤本頼生准教授は、神道教化論・都市社会と神社・神道と福祉・神社制度史などを専門とする研究者である。本書は、筆者の関心領域である神社とも密接に関わる皇室の問題に焦点を当てたもので、基本的な事項から懇切丁寧に解説した著書となっている。本書は、「象徴と天皇」「讓位と退位」「元号と改元」「大嘗祭」「皇室財産」「海外王室の王位継承」などの皇室制度を知るための二十の章から構成されている。例えば、「讓位と退位」の章では讓位と退位の各々の語句が意味する基本的な概念を説明、皇位を受け給う天皇から見ると「受禪」という言葉で表現されることなどの説明からはじまり、植木直一郎の分類に倣い、歴史的に見た讓位の形式を、①生理的讓位、②宗教的讓位、③政事的讓位、④法律的讓位、⑤その他に分類している。そして、著者は「近代以前は讓位が定着していた時代」といえるが、讓位に伴う政争など弊害が少なくなかった

ため、明治の皇室典範において崩御のみを讓位の原因とする制度が定められたことを説明している。また、現行皇室典範制定時における、憲法の基本的人権の有無の観点からの讓位（退位）の可否についての議論も紹介されている。

本書はこのようにわかりやすい入門書でありながら、基本的事柄について専門的見解に基づいた正確な知識を押しやるのが可能になっており、現在および将来の「あるべき皇室制度」を考えるために極めて有用である。参考資料として、旧皇室典範のもとで制定された主な皇室令の一覧、現行の天皇・皇室に係る憲法条文および皇室典範、関係法等の概要部分が添付されているのも親切である。目前に迫った、憲政史上初となる讓位による御代替わりに向けて、「日本」の正統である皇室制度を理解するための入門書として、有志各位にお勧めする次第である。

大日本帝国憲法制定史調査会著

『大日本帝国憲法制定史』

神社新報社 平成三十年二月 A5判 八七八頁 本体一六〇〇円

紹介

本書は、昭和五十五年にサンケイ新聞社から発行された『大日本帝国憲法制定史』（明治神宮編）の復刊である。当時、明治神宮内に設置された「大日本帝国憲法制定史調査会」（編集委員長・大石義雄）にて企画され、原案を葦津珍彦が執筆、編集された書籍である旨が、復刊に際しての高山亨神社新報社社長による序文に述べられている。本書は、「第一章 前史―明治維新の思想」から筆が起こされており、単に法律的に憲法の条文解釈を施した書籍とは異なり、憲法制定に携わった人々の思想的背景から解説されている壮大な憲法制定史である。岩倉具視や伊藤博文の強い反対にあつて審議もされずに廃案にされた元老院の国憲案の草案なども収載されており、興味深い。特に「第十四章 朝野激突の波瀾」「第十五章 朝野の対立から合流へ」では、憲法典の草案起草直前のダイナミックな政治的状況が活写されており、読み物としても面白い。「第十六章 憲法典の起草検討」で

は、井上毅が起草案を作成し、「社会的君主主義者」口エスラーなどに批判を受けて甲乙二私案を作成し、それを受けて伊藤博文や、伊東巳代治、金子堅太郎により修正が加えられていき、そこには起草者の井上毅は諸事情によりほとんど関与せずに物事が進められていく過程が述べられている。なお、同書には「皇室典範制定史」も収載されているが、復刊にあたり附録とされた葦津珍彦『明治憲法の制定史話』は別冊となっている。本書の「跋文」において、大石義雄は「大日本帝国憲法は、明治天皇が皇祖皇宗の遺訓を体して欽定されたものであるから、大日本帝国憲法の精神的基礎を為す日本思想を理解することなくしては、大日本帝国憲法の制定史を語ることはできないのである。（中略）大日本帝国憲法は、これからの日本の進路を示す光として今も生きているのである」と述べている。御代替わりを直前に控えた今、本書をお薦めする所以である。

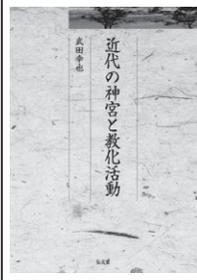


武田幸也著

紹介

『近代の神宮と教化活動』

弘文堂 平成三十年四月 A5判 四八〇頁 本体六七〇〇円



著者の國學院大學研究開発推進機構の武田幸也助教は、近代における神宮史を神宮教などの教化活動にかかわる組織と思想の内実と位置づけを明確にする側面から、一貫して研究してきた研究者である。本書の「はじめに」で著者は、明治五年に設立された神宮教院・神宮教会を基盤に展開した神宮の教化活動を追うことによって、「近代の神宮が教化という問題に対峙しつつ、どのような制度・組織や教説・思想を歴史的に展開していったのかを明かにし、教化という視点から近代神道史を再検討しようとするもの」と課題を設定している。著者は、神宮教院から戦後の神社神道にいたる神宮の教化活動の歴史を、「祭教分離」や「神社非宗教論」等を背景とする制度的枠組みの中において、神道信仰の宣揚に努力し続けた歴史であり、そのような神宮の教化活動は戦後の制度的改変を通じてなお、現在の神社本庁や戦後の神道人にも受け継がれているとしている。神宮奉斎会会長も務

めた今泉定助の皇道発揚運動を分析する章では、今泉が様々な事情により会勢が減退していく奉斎会を立て直した活動の軸足を講演活動や伊勢参宮の励行などに移しつつ奉斎会の枠組みを超えた思想活動を展開する様子が、彼の超宗教化していく神道思想の内実的分析も含め活写されている。本書は、これまで詳細に検討されてこなかった史料を丹念に読み解き、神宮の活動に関わる組織の展開や人物の動向、思想的展開までもが詳しく明らかにされており、近代の神宮史はこれから本書を重要な研究成果としてみます進展していくであろう。著者は、今後の課題の一つとして神宮奉斎会本院を含めた中央の動向についてはかなり明らかとなったが、中央の方針を受けた地方の活動は明らかでなく、特に関連して各地域の奉斎会の関係者と神職や教派神道教師の関係を明らかにするのが重要であると述べている。有志各位に広くお勧めする。

刑部芳則著

紹介

『公家たちの幕末維新―ペリー来航から華族誕生へ―』

中央公論新社 平成三十年七月 新書判 三三〇頁 本体九〇〇円



幕末から明治維新までの歴史は主として武家を主人公とし、公家たちは歴史に翻弄される優柔不断な脇役として描かれることが多い。しかし、公武合体から王政復古まで、歴史的に彼らが果たした役割は大きい。武力こそ持たないものの、天皇復権のために志士たちを扇動し、大名と交渉を重ねた公家たちの歴史的役割はこれまで等閑視されてきた。

「web 中公新書」で公開されている著者へのインタビューによると、幕末における公家たちの通史（本書）を著すにあたり、正親町三条（嵯峨）実愛を「隠れ主人公」とし、関白、議奏、武家伝奏を重要な脇役として置き、正親町三条の盟友中山忠能、宗家の三条実美、政治的な相手である岩倉具視、大原重徳なども脇役としたとのことである。先述の公家への低評価の原因は、江戸時代以降の公家に関する研究の遅れにより、彼らの本当の姿が知られていないことによると著者は語る。岩倉具視

だけが「策士」なのでなく、三条実美も決して気弱ではなく、大原重徳は頑固で強直であり、正親町三条実愛は政治的なバランス感覚に長けている人物なのである。公家にも武家と同じように開国容認派、穏健的尊攘派、急進的尊攘派など様々な立場があり、相克があったのだ。本書は、当時の公家たちの政治的動向を細かく追うことでその内実を明らかにする。岩倉具視や三条実美等の新政府の重鎮が幕末期に実際に朝廷内で活躍した期間は短いこと、関白、議奏、武家伝奏など朝議の主要メンバーのみならず、下位の公家たちも朝廷の意思決定に関わったことが描かれる。王政復古に至り公家における激しい政治闘争は一区切りを迎え、朝議等で枢要であった撰家なども京から追放され、一方で岩倉具視や三条実美が復活し急激に台頭した。必要に応じて旧來からの公家の慣習も説明され、具体的な有職故実についても知見を得ることができると著者は語る。一読をお勧めする。

山口輝臣編

〈史学会シンポジウム叢書〉

紹介

『戦後史のなかの「国家神道」』

山川出版社 平成三十年十月 A5判 二七五頁 本体四〇〇円



「国家神道」は、近代日本社会を特徴づける重要概念の一つと見なされ、戦後日本の政策・社会運動・宗教運動などを背景にして研究されてきた。しかし一方で、実践とも絡んだ激しく妥協のない対立があり、また一方では、専門家集団による最先端の研究成果と、広く流布しているイメージとが大きく乖離しており、そこを不思議な相互無関心が支配して、いまま研究の帰趨が定まらない。このような状況を変えるため、「国家神道」を研究するという営為そのものを、戦後史の中に位置づけようとしたのが、二〇一七年史学会第一一五回大会のシンポジウム「戦後のなかの「国家神道」」を基に編集された本書である。

本書は、本論および附録とで構成されている。本論は、明治維新期から戦後初期までを対象にしたⅠ部「国家神道」まで（藤田大誠「国家神道」概念の近現代史」、荻部直「国家神道」と南原繁）、一九五〇年代から七〇年代を

中心に、「国家神道」が今日の通俗的な用法のような形で定着する過程を論じたⅡ部「国家神道」をつくる（昆野伸幸「村上重良「国家神道」論再考」、須賀博志「戦後憲法学における「国家神道」像の形成」、八〇年代以降を扱うⅢ部「国家神道」のこれから（谷川穰「国家神道」論の現状をどうみるか）、山口輝臣「国家神道」をどうするか）の三部構成。いずれも、「国家神道」を研究することそれ自体を、より広く戦後の政治史・思想史・宗教史・社会運動史などのなかで理解すること」を企図しており、単なる研究史の整理とはなっていない。また関連するテーマを扱った十のコラムが置かれているほか、巻末の附録「国家神道」関連年表「国家神道」主要文献抜粋「国家神道」研究主要参考文献」も、内容が充実している。

論考・コラム・附録によって、論点の視野の多角化と、今後の研究の基盤とを図ろうという意欲に溢れており、読み応えのある一冊である。